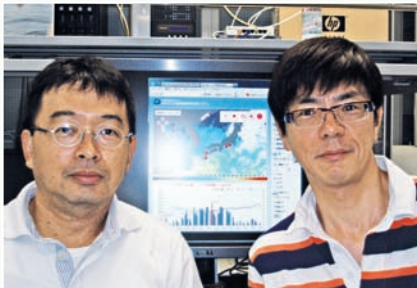


漁業者と取り組むシラス漁況の解析ツール



【研究課題名】
沿岸シラスの最適漁場探索支援ツールの開発
【実施年度】平成23～25年度

海洋・生態系研究センター モニタリンググループ **市川忠史**
生態系モデルグループ **清水 学**
共同実施機関：宮崎、大分、高知、徳島、静岡各県、北海道大学、
(株)ソニック

目 的

日本の食卓に欠かせない「ちりめんじゃこ」は主にカタクチイワシの赤ちゃん（仔魚）のシラスを乾燥させたものです。シラスを対象とした漁業は太平洋沿岸域でも広く行われ、シラスは重要な漁獲対象魚種となっています。シラス漁場の形成は、河川や黒潮流路などによる海洋環境の影響、親であるカタクチイワシの分布・産卵量などに大きく左右されるため、漁業者は漁ができるか事前に探索を行います。そこで、シラス漁の効率化に必要な情報を漁業者と共に集め、漁模様（漁況）の判断材料を提供すること、集めたデータを資源管理や沿岸モニタリングなどに役立てることを目的に研究を行いました（図1）。

方 法

シラス漁業者と協力し、日々の漁獲データ、漁船の魚群探知機や水温・位置情報を収集・解析できる仕組みを参画県と共同で構築しました。また、太平洋沿岸でモニタリングしているブイや人工衛星による水温、黒潮流路など最新の海況情報を統合して把握できる機能、過去データを用いてシラス漁況を解析できる仕組みを開発しました。

結 果

日別のシラス漁獲量と海洋環境データを同時に一つの地図上に表現し、情報発信するシステムを構築しました（図2）。平成24年8月から試験的に協力漁業者へ情報提供を始め、現在も改良を進めています。どのような条件で漁場が形成されるのか、一斉調査の結果や過去データを解析し、水温・黒潮流路といった海況情報や他海域のシラス操業情報などと

の関連を整理することで、シラス漁況の判断材料となる漁場探索指針として地先ごとに漁業者へ情報提供できるようになります。

波及効果

発信する情報を有効に活用してもらうことでシラス漁場探索の効率化が図れると期待されます。また、漁業者と協力して進めることで情報量の少ない極沿岸域の資源・海洋情報を継続して収集することが可能となります。

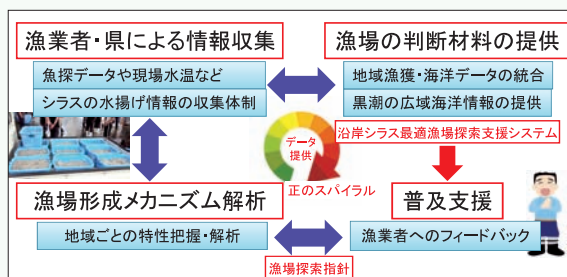


図1 研究課題の目的と実施内容のイメージ
漁業者の協力がなくなるほど提供できる漁況情報も充実していくシステムを目指します。

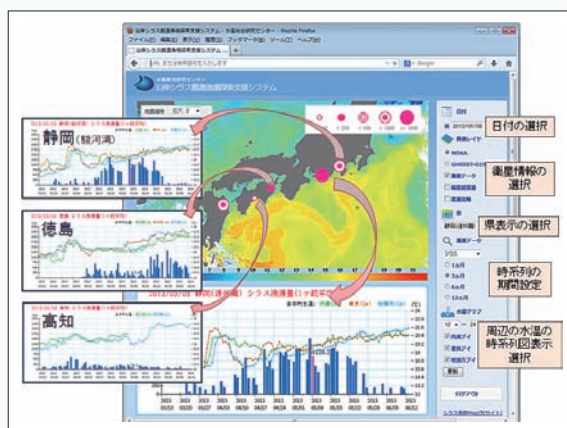


図2 各地の日別シラス漁獲量と海洋環境データを同時に見られる「沿岸シラス最適漁場探索支援システム」の画面（2013年5月13日の例）